

老人研

NEWS

No.235

2009.11

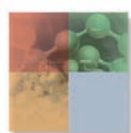
東京都老人総合研究所

Index

記憶の研究と我々の生活	1
老年学公開講座レポート	3
新たなアルツハイマー病予防法の開発	4
今よりもさらに安心して暮らせる地域をつくるには	5
海外渡航ミニレポート	6
表彰	7
講演会予定／マスコミ報道	8



第104回 老年学公開講座
演者と一緒に「北区さくら体操」!(右端の4人)



「記憶の研究と我々の生活」

トピックス

老化制御研究チーム(老化再生) 研究部長 遠藤 昌吾

「老人が一人亡くなる事は、図書館を一つなくす事である」

老人の部分がおじいちゃんやおばあちゃんになったり、図書館の部分が百科事典や本になったり、様々に変化しますが、高齢者の重要性そして記憶の重要性を示す同様の文章が世界中に存在します。記憶を研究する私の大好きな文章です。

長い人生で得られた豊富な知恵や経験は、過去と現在そして未来をつなぎ、豊かな文化や社会を支えています。これらの知恵や経験は“記憶”です。また、世界に多数存在する文字を持たない社会においては、長老の記憶が歴史や伝統を伝える唯一の手段であり、それが社会や部族、家族、自分を守ってきました。老人が記憶を伝える事は社会が繁栄するために必須です。このトピックスでは、私の研究テーマである記憶についてお話ししたいと思います。

記憶は暗記だけ？

記憶と聞くと、暗記や約束ごとを思い浮かべることでしょう。しかし、私たちはこの文章を読んでいる瞬間も記憶を使っています。意味を理解するまで文章を記憶していなくてはなりません、それぞれの単語の意味を記憶から引きだし、単語の持ついくつかの意味の一つを記憶から選び出し、過去の記憶に照らし合わせて文章の意味を理解する作業をしています。全て記憶

の助けなしにはできない作業です。さらに、家に帰る事、テレビのスイッチを入れる事、包丁を取り出す事、冷蔵庫のキャベツを取り出す事、キャベツを千切りにする事。何気ない行動ですが、全てにおいて記憶が必要です。キャベツを切る時の“身体の動きの記憶”は、意識にのぼりませんが、極めて重要な記憶です。また、好き、嫌い、うれしい事、悲しい事など感情に関する事も記憶に蓄えられていきます。これら蓄えられた記憶に基づいて、何を食べ、どこへ行き、何を話すのかという私たちの行動が決定されます。

私たちは毎分、毎秒の精神活動や個人的な経験を蓄積していきます。記憶はこれらの経験を張り合わせて保存する接着剤です。この接着剤を用いて経験を一生拡大して、“私”という人間が出来上がります。それゆ

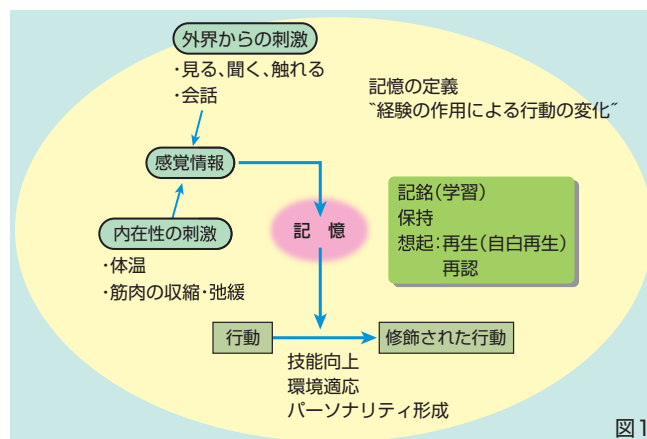


図1

え、疾病等でこの接着剤が機能しなくなると、過去を再生する能力を失い、人とのつながりが失われ、自分とのつながりが失われてしまいます。

脳の柔軟性とは？

動物の驚くべき能力は、親や環境、社会から学習により記憶を蓄え、自分の行動を修飾する能力です（図1）。これはまさに記憶の定義です。動物は、与えられた様々な環境、すなわち、食料事情、気候、敵味方などを知り、その環境を巧みに利用して生存します。すなわち、自然の中で食べ物のある場所を覚え、寒くなる前に暖かい所へ移動し、危険な敵を避けます。さて、生存していくために極めて重要な記憶はどのようにして形成されるのでしょうか？

記憶が脳に蓄えられるという事に反対する人はいないでしょう。脳も身体の一部ですから、身体的设计図である遺伝子に基づいて形作られます。しかし、脳の回路網が完全に固定されたものであると、私たちは常に紋切り型の行動しかできません。そこで登場するのが脳の柔軟性、“可塑性（かそせい）”です。脳の可塑性が脳の回路網を変化させることで、身体の内外的様々な感覚情報を取り入れ記憶として蓄えていきます。記憶の過程は感覚情報を獲得するステップ（記銘）、その情報を保存しておくステップ（保持）、そして保存情報を読み出すステップ（想起）からなり、どの一つが欠けても記憶として成立しません（図1）。そして、情報を獲得するステップは「訓練による習得を重視する時」に学習と呼ばれます。想起は再生と再認に分けられ、再生は、犯人はどんな人でしたか？という質問に、何の手がかりもなしに思い出す想起、再認は示された写真の中から犯人を選ぶ想起です。このようにして日々蓄えられる記憶は私たちの行動に影響を与え、さらに、私たちの性格を決定していきます。

記憶の研究

初期の記憶の研究では、哲学や心理学が重要な役割を果たし、記憶の特徴付けや詳しい分類等が行われてきました。1970年代に脳に可塑性が存在することが化学的に証明され、可塑性に関与するタンパク質などの分子に関する研究が精力的に行われました。しかし、可塑性はあくまでも記憶を支えるものであり、記憶そのものではありません。記憶の詳細の理解には動物の行動観察が必要です。

1990年代に入って、ある遺伝子を欠損させたり、発現を高めたりした、遺伝子改変マウス（遺伝子ノック

アウトマウス等）が登場しました。丸ごとの動物ですから、マウスの記憶を観察する事ができます。これらのマウスを解析する事で改変した遺伝子の機能と記憶の関わりを理解できるようになりました。

このような遺伝子改変マウスの中には、アルツハイマー病を含む各種の精神神経疾患モデルとして用いられているマウスが多数存在します。これらのモデルマウスは、病気の原因となる遺伝子解析や治療法開発のために現在の医学研究においてなくてはならないものとなっています。

私の研究室でも各種の遺伝子改変マウスを有しています。その中には、ある遺伝子をなくした事で記憶力が強化されたスーパーマウスもいます。この遺伝子は、生体内で記憶の形成にブレーキをかけていると考えています。不必要に強力な記憶を形成する事は生体にとって不利な事が多いと考えられます。たとえば、失恋の記憶や痛みの記憶、いつまで持っても人生を良くしません。記憶を含め何事も行き過ぎないように、生体の機能にはアクセルとブレーキがあらかじめ用意されています。この遺伝子をなくして記憶力が強化したスーパー人間は作り出せませんが、この遺伝子のブレーキ機能を弱くする薬物でみなさんの記憶を強化できる日が来るかもしれません。

私、記憶の研究、これからの展望

学位取得まで暮らした北海道で、私はカゼばかりひいていました。北海道以外ではじめて暮らした地がテキサス州ヒューストンでした。亜熱帯性の気候は私に合い、カゼとは無縁の生活でした。私には北海道の気候が合わなかったと気がつきました。私は転地保養の効用を信じます。

ヒューストンのテキサス大学医学部、ノースキャロライナ州のデューク大学メディカルセンター、さらにヒューストン大学で、記憶の研究を行ってきました。日本に戻り、理化学研究所脳科学総合研究センター、そして、沖縄科学技術研究基盤整備機構(OIST)を経由して、2009年10月に老人研に赴任しました。私は薬学部出身であり、臨床との関わりを考えた基礎研究を行える場所を探していました。幸運にも老人研において研究室を持つ事ができました。

近年、医療技術の向上により、以前は救えなかった命を救う事ができるようになりました。しかし、皮肉な事に、助かった患者さんは脳に障害が残り記憶が障害される例が増加しています。記憶は思考、言語、感情等の高次脳機能の基礎ですから（図2）、事は重大で

す。また、訪れる高齢化社会における、認知症を含む記憶障害の克服は、患者のみならず家族そして社会にとって極めて重要な問題です。記憶の基礎的な研究があって初めてこれらの重要問題の解決が可能となります。私たちの研究が記憶障害治療や医薬品開発の基礎となり、福祉向上に寄与することが私の大きな希望です。これまでの記憶の研究に老人研という環境を加えることで、研究を大いに発展させていきたいと思っています。また、我々の生活において記憶そして記憶研究がどんなに重要かを多くの方に知っていただきたいと思っています。このトピックスがその一助になれば幸いです。

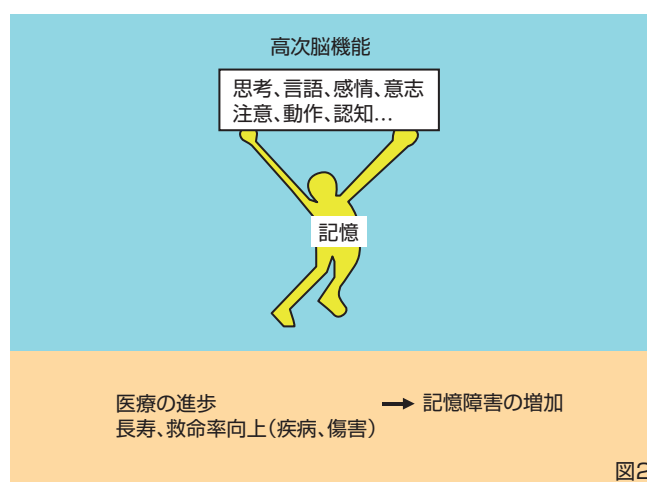


図2

「PET(ペット)、パッと見てわかる～健康と病の画像を究める～」 第104回老年学公開講座

9月2日、北とぴあさくらホールにおいて、第104回老年学公開講座「PET(ペット)、パッと見てわかる～健康と病の画像を究める～」を北区、東京都老人クラブ連合会と共催で開催しました。難しいテーマにもかかわらず多数の高齢者をはじめ800名近い大勢の皆さんにご参加いただきました。

今回は、外部からも二人の講師を招き、四人の講師で講演を行いました。

最初に当研究所神経画像研究チーム 石渡喜一郎長が、続いて行われる三人の講演をより理解できるよう「PET 入門」として、PETの原理や専門用語の解説をしました。

次に附属診療所 石井賢二所長「見てわかる脳の健康」では、脳の働きから脳の成長過程、脳の加齢は、マイナスのイメージで語られることが多いが、PETでは年齢を重ね社会的な成長を重ねると質的な変化が起こるというプラスのイメージで語ることができるとのお話がありました。

さらにリフレッシュタイムとして北区で活動されている「北区さくら体操」の皆さんの発刺とした体操実演がありました。続いて、国立国際医療センター放射線科 窪田和雄医師から、「がんの診断」ということで、PETでは部位を絞って行うCTとは異なり全身のがんを一度に調べることが出来るという優れた面がある一方、見つけにくい不得意ながんもあり、特性を踏まえたCT等との組み合わせが必要等のお話をいただきました。

最後に、東北大 田代学准教授から、「心臓と筋肉の活動をみる：全身運動と健康」と題して、私たちの体内には様々な臓器において筋肉が活躍しており、その中の代表格ともいえる心臓(心筋)、他、体内で活躍している筋肉の細胞の役割についての紹介と、PETによる画像化が病気の診断や健康づくりとどのように関係しているかについてのお話がありました。

来場者の方からは、「難しい題材だったが分かりやすい解説で、良く理解できた」などたくさんのお声をいただきました。

「老いと向き合う～こころのバランスを大切に～」 第105回老年学公開講座

10月8日、第105回老年学公開講座「老いと向き合う～こころのバランスを大切に～」を文京区と共催で開催しました。台風という悪天候にも拘わらず、560名を超える大勢の皆さんにご参加いただきました。

最初に自立促進と介護予防研究チームの栗田圭一研究部長が「増えているうつ・あなたは大丈夫ですか」と題して、認知症とともに、高齢者に多いうつ病について話をされました。「うつ病は、高齢者人口の増加とともに、増えており、心ばかりではなく、脳卒中や心筋梗塞等のさまざまな体の病気にもかかりやすくなり、死亡率を高める病気である。このように、高齢者に多い、うつ病から「心と体」の健康を守るために、うつ病のことをしっかり理解し、予防できる地域づくり、街づくりが大切である」ということをお話ししました。

次に老年病理学研究チームの青崎敏彦研究副部長の「動物のメンタリティーを測定する」では、ここでも生涯発症率20%を超えるといわれているありふれた病「うつ病」について、その原因を探るために、動物モデルを使用した基礎医学研究の紹介がありました。うつ病のようにたくさんの遺伝子が関わって起こるような病気の場合には人の家系から原因を探ることは困難であることから、動物を使つての、試みがなされており、原因遺伝子を探るための、(少しかわいそうですが?)マウスの尻尾に輪ゴムで吊るす尾懸垂テストや容器の水の中でマウスを泳がせる強制水泳テスト等がイラストで分かりやすく紹介されました。

最後に福祉と生活ケア研究チームの増井幸恵研究員から「長寿者から学ぶ幸福な生き方」と題して、「超高齢者」と呼ばれる85歳以上の方を対象とした10年間の調査研究で得られた研究成果が紹介されました。「この研究の必要性は、1950年からの現在までの間に超高齢者は30倍も増加しているという背景があり、その実態を明らかにして、今後の超高齢社会への対応を考えていくことである。また、超高齢者は、身体機能が大きく低下し、うつ状態に陥ってもおかしくない状況ながらも、「私は幸福」と思える心の強さを持っており、どうして、このような強さを持つことができるのか、この方々の特徴を詳しく知ることにより年老いてもいつまでも幸福でいられる秘訣を見つけ出すことができる。」これらの研究から分かったこととして、見栄を張らない、無理をしない等の体が悪くなっても幸福感を高く保つための気持ちの持ち方、考え方のコツなどの話がありました。



新たなアルツハイマー病予防法の開発

平成21年度 理事長研究奨励費(個人)採択 老化機構研究チーム 研究員 赤坂 啓子

生体を構成するタンパク質の多くには、「糖鎖」と呼ばれる修飾がついています。糖鎖は糖が長くつながったもので、タンパク質の性質や他のタンパク質との相互作用に大きく影響します。今回、私はアルツハイマー病(AD)と糖鎖の関係について調べました。

ADとは認知症の一種で、記憶の障害にはじまり、思考や判断力の低下・言葉や行動の異常などの症状を示す進行性の病気です。現在、進行を遅らせる薬はありますが、根本的な治療法や発病の原因はまだ明らかにされていません。ADの特徴として、脳に老人斑と神経原線維変化という構造物が出現することと、脳が萎縮することがあげられます。このうち老人斑はアミロイドベータ($A\beta$)というペプチドが蓄積したものです。 $A\beta$ はAPPというタンパク質が切断されてできる断片で、 $A\beta$ 40と $A\beta$ 42の2種類があります。とくに $A\beta$ 42は蓄積しやすく、ADを引き起こすと考えられています。

ところでADには、家族性ADという遺伝性のものと、遺伝によらない孤発性ADの2種類があります。家族性ADのなかにはAPP遺伝子の変異によって、 $A\beta$ の産生がおかしくなるものがあります。APPには糖鎖がついていますが、私はこの糖鎖が $A\beta$ の産生異常に関与しているのではないかと考え、変異をもつAPPの糖鎖の構造を調べました。その結果、正常なAPPに比べ変異型APPではbisecting GlcNAcという糖鎖構造が増えていることがわかりました。また、孤発性ADの脳でbisecting GlcNAcを作る酵素(GnT-III)が増加していることも明らかになりました。これらのことから、「bisecting GlcNAcをたくさん持つAPPは $A\beta$ を生じやすい」という仮説をたて、今度はbisecting GlcNAcをたくさん持つAPPを作って証明を試みました。GnT-IIIを過剰に発現する細胞を作り、分泌される $A\beta$ の量を何もしていない細胞と比べてみました。すると、予想に反して $A\beta$ 40も $A\beta$ 42も約40%程度減少していました(図1)。そこで、先ほどの仮説とは逆にADで増加した $A\beta$ がGnT-IIIを誘導するのではないかと考えました。細胞に $A\beta$ を添加しGnT-IIIの発現量を調べたところ、 $A\beta$ 42を加えたものでは、GnT-IIIが増加していました。

以上の結果から、老化などにより $A\beta$ 42が増えるとGnT-IIIが誘導され、APPの糖鎖構造が変化し $A\beta$

の産生を抑制する、という新しいメカニズムが想定されました(図2)。つまり、GnT-IIIはADにおいて生体防衛的に働くと考えられます。

今後はGnT-IIIの増加からどのような経路を経て $A\beta$ の低下が起きるのかを明らかにすること、また、食品成分からGnT-IIIを増加させるものを見つけ出し、ADの予防や治療に役立てることを目指して研究を進めていきたいと思います。

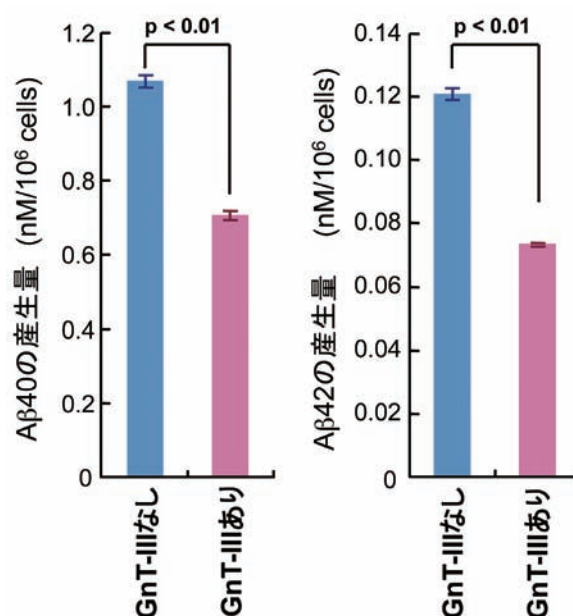


図1 $A\beta$ の産生に対するGnT-IIIの影響

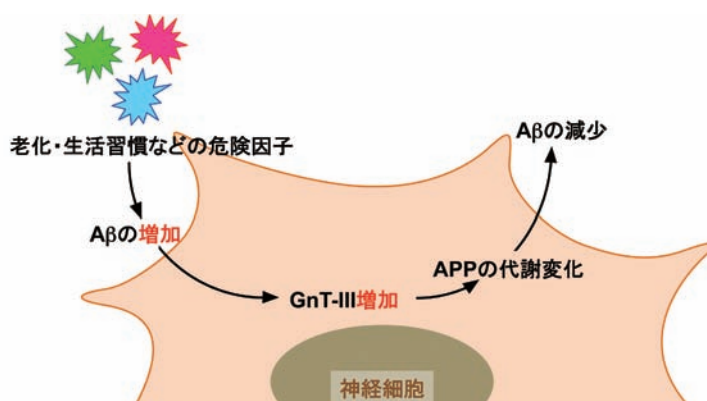


図2 GnT-IIIによる $A\beta$ 産生減少のメカニズム

赤坂研究員と西研究員は、以前より老人研で研究を続けてきましたが、今年度より研究員として採用されました。



今よりもさらに安心して暮らせる地域をつくるには一ひとりひとりの意識が大きな力になる?—

平成21年度 理事長研究奨励費(個人)採択 社会参加と地域保健研究チーム 研究員 西 真理子

今年4月より社会参加と地域保健研究チームの研究員として採用されました西と申します。私は大学院で、心理学を専攻し“記憶の歪みやすさ”について研究をしながら、本チームの研究の1つである「高齢者による学校ボランティア活動」の研究に従事してきました。この流れで、昨年度より「行政と住民ネットワークの連携による孤立予防」を目指した研究事業に携わっていき、この研究の一部について9月に理事長研究奨励費に採択されました(題目:高齢者が安心して暮らせる地域づくりに関する介入研究—孤立感に着目して—)。大変感謝しております。

地域で積極的に活動されている高齢者

「高齢者による学校ボランティア活動」におけるボランティアとは、幼稚園や小学校などの子どもが集まる施設において、高齢者が子どもに絵本を読み聞かせするというものです。研究内容の詳細は「老人研ニュース no.205(平成16年11月発行)p4-5」を参照ください。この活動は、高齢者が地域社会に貢献することが、自身の健康増進に寄与するかどうかを調べる側面だけでなく多世代(高齢者、子ども、施設の職員、保護者)が交流する地域づくりの側面を持ち合わせています。



学校ボランティア活動の一風景です。「もうすぐ読み聞かせが始まりますよー!」手作りの看板を持って昼休みに校内にまわるボランティアさん。ボランティアさんを見つけ、元気いっぱいについてまわる子どもたち。

地域社会との接触が乏しい高齢者

ボランティアに参加されている高齢者は、自らボランティアに志願した積極的な方々であり、私は多くのパワーをいただけてきました。同時に「同じ年齢になった時に、自分もこのようにパワフルに地域社会に関わっているのだろうか」と感じる事が度々ありました。この自分への問いがきっかけで、地域社会と積極的に関わりながら生活する高齢者がいる一方で、何らかの理由で地域社会との接触が乏しい状態(社会的孤立)にある高齢者に目が向くようになりました。そして「孤立予防」を目指した研究を志望するに至りましたが、社会的孤立あるいは孤立しがちな方と接触を図ることは大変難しいことです。では、どのようにしたらこのような状態にある方々にアプローチすることができるのでしょうか。

孤立感に着目して

客観的に見て社会や地域から孤立した状態にある方へのアプローチ(予防策)を目指す第一歩として、私はまず孤立感や将来孤立することへの不安といった主観的な感覚に着目しました。この感覚を軽減する一策を探ることを目的として研究を進めたく、この度は理事長研究奨励費の申請をしました。社会的孤立や孤立感、もちろん高齢期特有の事象ではありません。また、孤立感を持っていること自体が、必ずしもマイナスであるとはいえません。しかしながら、高齢期には地域で過ごす時間がそれ以前よりも多くなり、これを踏まえると、孤立感や将来孤立することへの不安を抱えながら地域で日々過ごすことは、精神的に健康な状態とは言えません。したがって、孤立感や孤立することへの不安を軽減する方法(予防策)を探ることは重要な研究課題でしょう。

孤立感あるいは将来孤立することへの不安を予防する方法としては、その方を取巻く地域・近隣の人的環境をよりよくする案があげられます。孤立しがちな高齢者を見守ろう!老後も安心して暮らせる地域にしよう!などと、より多くの住民が意識することで、地域づくりに大きな力が加わることになります。住民一人一人が「孤立の問題」を意識し、地域づくりに関心を持つことで大きな力が生まれると思われます。そして、地域環境が少しずつ変わっていくことで、地域からの孤立感や将来孤立することへの不安といった感覚は軽減できるのではないかという仮説のもと、孤立予防のプログラムを開発・効果検証していきたいと思います。その結果を皆様に報告できるよう研究に尽力していきます。安心して暮らせる地域づくりの方策を追求することは、自分自身の将来の問題でもあるということをお忘れずに、時間もかかる研究ではありますが地道に研究を行っていききたいと思います。



地域での公園や集会所を利用して、介護予防を目的とした体操を定期的に行っている某地区。その体操の運営を担っているボランティアに集まっていただき「地域で実行可能な孤立予防」を考える意見交換会を定期的に行っています。その一風景です。この写真の会では、地図を利用し、体操参加者の居住地域の情報をもとに、おおまかなプロット図を作成して提示しました。「どのあたりに住んでいる人が体操に参加しているのか?」「体操の会場をどのあたりに増やしたら、より多くの地域住民が参加できるか?」など、皆さん興味津々でプロット図を眺め、現状把握をしたり、今後の課題を見出したりと、色々な意見や感想があがりました。

海外渡航ミニレポート



社会参加と地域保健研究チーム
非常勤研究員 小川貴志子

1. ノルウェー(オスロ)2009年6/24-27 2. ヨーロッパスポーツ科学学会で、シンポジストとして発表

Ageing and neuromuscular adaptation という題名のシンポジウムのシンポジストに選ばれ、高齢者のレジスタンストレーニングによる筋量増加が CRP や TNF- α 等の炎症指標の減少をもたらす内容の研究成果を報告しました。この学会は、若い研究者もたいへん多く発表していましたが、今までになくアラブ系の若い男女の参加が目立ち、新しい研究の広がりを感じました。ほとんど観光はできませんでしたが、コンチキ号博物館があると知り、出かけました。仮説の証明のために小さな筏で大海原に乗り出した科学者の勇氣に感動しました。

1. ドイツ(チュービンゲン)2009年9/21-23 2. 国際運動免疫学会で、口頭発表

この学会は2年毎に開催され、運動免疫学の研究者が世界中から集まる学会です。我々の研究チームは、今年度より高齢者の新しい生体指標を探索する研究を始めました。新しい生体指標の一つとして、血液中の熱ショックタンパク質(分泌型 heat shock protein: HSP) が予測されています。組織内の HSP は古くから多くの研究が行われてきましたが、分泌型の HSP の存在は2000年に入って注目されるようになったため、未だ HSP が組織から血中に漏れ出す仕組みや、役割について十分にわかっていません。今回の私の報告は、寒冷曝露と運動というモデルを用いて、HSP が血中に漏れ出す仕組みを生体(ヒト)で証明しようとしたものです。今まで、ストレスホルモンであるノルアドレナリンが HSP を誘導するという説が有力でした。これに対し、私の説は、ATP(アデノシン三リン酸) 誘導を示唆するものです。今回、ノルアドレナリン説を提唱している研究者が参加するため、「直接対決!」と、意気込んで学会に乗り込みました。決着がついたわけではありませんが、発表は、アニメーションなどを用いたためとても好評でした。チュービンゲンは、会場であるチュービンゲン大学が中心の町でした。400年前に創立されたこの大学は、天文学者のケプラーや哲学者のヘーゲルなどを輩出しています。



老化制御研究チーム
研究員 近藤 嘉高

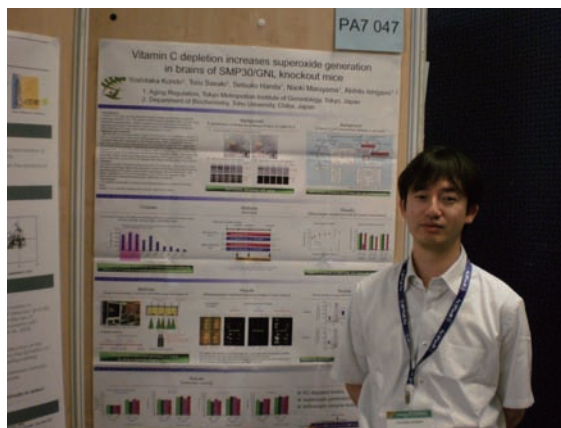
1. フランス(パリ)2009年7/5-7/11 2. 第19回国際老年学会議(IAGG)でポスター発表

国際老年学会議は、4年おきに開催される老年学および老年医学の大きな学会です。ビタミンCが欠乏した脳において活性酸素の生成が増加するという研究成果をポスター発表しました(写真)。この学会には初めて参加したのですが、老年学と老年医学の発表演題が非常に多く、基礎研究の発表は少ないことから、活気に乏しく寂しい思いをしました。

パリは、魅力的な観光名所がとても多く、ルーブル美術館やエッフェル塔など幾つかを訪れました。ヴェルサイユ宮殿(写真)では、すりが多発する危険な場所ということで、人ごみには近づかないように気をつけていたのですが、いつの間にかバッグのファスナーが開けられていました。びっくりすると共に、すりの手際の良さに妙に感心してしまいました。何も盗られなかったのは、幸いです。



ヴェルサイユ宮殿



老化機構研究チーム 研究員 新海 正

1. フランス(パリ) オランダ(アムステルダム) 7/5~12
2. パリ: 第19回国際老年学会に参加し、ポスター発表をおこなった。
アムステルダム: ライデン大学およびライデン大学メディカルセンターを訪問し、老化研究について情報収集ならびに意見交換をおこなった。

国際老年学会 (IAGG) は老化・老年学研究での最大級の国際会議であり、世界各地から自然科学、社会科学両分野の研究者が4年ごとに一堂に会することになっている。今回は "Longevity, Health and Wealth" という課題のもとに、シンポジウム、口演、キーノート・レクチャー、ポスター展示、フランス語での老年学セミナー、さらには関連企業主催のサテライト・シンポジウムと多彩で膨大な規模の会合が開かれた。研究発表にはアルツハイマー、認知症、ガン、栄養、肥満とメタボリック・シンドロームといった医療関連型や生活密着型の報告が数多く見られ、老人研でおこなっているわれわれの老化研究が、世界の人々に対して様々な貢献しているということを改めて感じさせられた。

今回の会議の傾向として、老化や寿命・長寿に関連する薬剤研究の進展があげられよう、既知の化学物質を使って新薬に用いようとする試みや、まったく新種の薬剤開発まで多種多様な報告があり、この分野を数多くの研究者が注目しているということを実感した。

国際老年学会終了後すぐが「巴里祭」であった。「国際会議の後もパリを楽しんでいって」という主催者の折角の配慮を、スケジュールのために無にってしまったのは、ちょっと心残りである。



学会参加証



第68回日本公衆衛生学会総会 優秀演題賞



福祉と生活ケア研究チーム
研究員
増井幸恵

「地域在住超高齢者における視聴覚機能と健康関連 QOL・抑うつ状態との関連性」により、第68回日本公衆衛生学会総会、優秀演題賞を受賞いたしました。この研究では、板橋区の某地区で85歳以上高齢者の悉皆調査を行い、身体機能や認知機能の低下とは独立して、聴覚機能の低下とうつ状態や健康関連 QOL の悪化が関連することを明らかにしました。このような現象は欧米では数多く報告されていますが、日本の高齢者、中でも視聴覚機能の低下が大きい85歳以上高齢者ではこれまでほとんど報告がなく、高い評価を得ました。これらの知見は超高齢期の QOL の維持向上のための援助方法の指針に対して役立つと考えられます。

長寿科学振興財団 平成21年度 若手研究者表彰事業 会長賞



老年病理学研究チーム
協力研究員
仙石鍊平

東京都健康長寿医療センター・高齢者ブレインバンク研究部長・村山繁雄博士の下での3年間の神経病理研究を基礎に、平成20年10月より米国コロンビア大学に設置されているニューヨークブレインバンクに留学し最先端のブレインバンク管理方法、神経病理診断の技術等を学んできました。米国で最先端のブレインバンク技術を体得してきたことが、長寿科学振興財団に評価され、平成21年9月2日に平成21年度若手研究者表彰事業で最高の会長賞を受賞しました。今後得られた技術・知見を高齢者ブレインバンクに還元していく予定です。

第64回日本体力医学会大会研究奨励賞 受賞



老化制御研究チーム
研究生
三上恵理

9月の日本体力医学会大会におきまして「日本人トップアスリートに関連するミトコンドリアハプログループ」で研究奨励賞を受賞致しました。本研究は、オリンピック出場経験のある日本人を対象としてミトコンドリアゲノムの解析を行い、持久系のトップアスリートと瞬発系のトップアスリートにそれぞれ関連するミトコンドリアハプログループを報告したものです。

トップアスリートの遺伝的特性の研究は日本では進んでいないことから、今後の発展が期待される研究として評価を受けました。

老年学公開講座 次回の予定

 手話通訳を同時に行います。事前申込みは不要です。

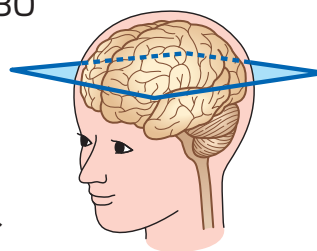
入場無料
事前申込不要
当日先着順
1200名

講演：^{ペット}**「PET パッと見てわかる**
～健康と病の画像を究める～」

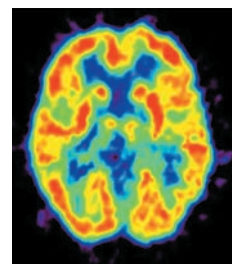
日時：平成21年12月8日(火)午後1:15～4:30

場所：板橋区立文化会館
大ホール(当日先着順1200名)

最寄り駅：東武東上線大山駅 下車徒歩3分
都営三田線板橋区役所前駅 下車徒歩8分



治療後



主なマスコミ報道

H.21.9 ~ H.21.10

社会参加と地域保健研究チーム

研究員 深谷太郎

- 「長期縦断研究について」
(NHK テレビ おはよう日本 H.21.9.21)

自立促進と介護予防研究チーム

研究副部長 金 憲経

- 「お達者筋力アップ健康教室」
(NHK テレビ おはよう日本 H.21.9.21)

自立促進と介護予防研究チーム

専門副部長 大淵修一

- 「無理なく自宅で続けられる介護予防8」
(FCJ vol.21 福祉住環境コーディネーター協会 情報誌 H.21.10.25)
- 「はなまるマーケット 今日のとくまる 無理せず 楽に骨を守ろう」
(TBS テレビ H.21.10.29)

社会参加と地域保健研究チーム

研究副部長 藤原佳典

- 「本を通じてお年寄り仲間と仲よし〜りぷりんと・ネットワークでは」
(朝日小学生新聞 2009年10月28日)



105回 老年学公開講座

編集後記

人によりけりではあるが世間の健康志向ブームは過熱しているように見える。その中には科学的根拠が全くないものや結構危ないものが含まれている。マイナスイオンなどは典型的なもので先日もある温泉地で特徴として掲示されていた。大企業でもだまされているくらいだから、地方の温泉ではしょうがないかとは思いますが…。科学的根拠に基づいた健康情報を提供することが我々の重要な使命なのだ。

鵜翁
(しわおきな)



平成21年11月発行

編集・発行：地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター 研究所（東京都老人総合研究所）広報委員会
〒173-0015 板橋区栄町35-2 Tel. 03-3964-3241（内線3151）Fax. 03-3579-4776

印刷：コロニー印刷

ホームページアドレス：<http://www.tmig.or.jp>

無断複写・転載を禁ずる

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています